

津波忌 (三)

松浦 敬親

①津波忌やビルほどの鮫夢に出て 敬親

②本能は巨大津波を待ちながら つぎお

③繙帯を巻かれ巨大な兵となる 白泉

この中の①は、「津波に遭っていない人間が、津波忌などと言う造語を使って、安易に俳句を作るとすれば、今回の津波で大切な肉親を亡くされたご遺族や亡くなった方、大事な財産を一瞬にして失った方々に対する冒瀆と思います」と非難されました。

同様に、③は「戦火想望俳句」（内地で前線を想い描いた戦争俳句）とされ、「前線の兵士を冒瀆する」という理由で弾圧されました。当時の日本は主権在君で、天皇は現人神（あらひとがみ）でした。大日本帝国は神国とされ、「前線の兵士」は聖戦を戦う神兵だから、③は「冒瀆」とされたのです。

私は、戦後の主権在民の日本に生まれ、育ちました。しかも、幼少の頃から不条理に何度も直面し、それと戦うことで精神的な自由を獲得して来ました。だから、③のエスプリ（才知）に感心し、大いに笑います。しかし、兵がかわいそうで笑えない、と言う真面目な句友（女性）も居ます。

この句友は②も認めません。残酷すぎるというのです。底の浅い解釈です。作者が「わが本音」で、「タナトスの瞬間を書いた」と書いているよ

うに、この「本能」はフロイトを踏まえたものです。フロイトは、人は生の本能（エロス）と対立して、死への本能（タナトス）も持っていると考えました。②の作者は、それを自覚した上で、「ながら」と書いています。ここに、二律背反的な自分が居ます。彼もまた何度も不条理に直面し、それと戦って思索を深めたのでしょう。

一方、②を否定した句友には、この「ながら」の苦悩が見えていません。善人であることに安住して、「本能」を見失っているのです。だから、③の「巨大な兵」に同情はしても、作者の苦悩に気がつきません。こういう善人は、敵に対しては「本能」を暴走させる恐れがあります。

勿論、①を「冒涇」と決めつけて全否定した人も善人です。しかし、その結果どうなるかまでは、考えていません。その証拠に、彼の主張は表現の自由に反しますし、③を弾圧した人達につながります。

もう一つ、彼が考えていない重要なことがあります。それは、新季語「津波忌」が定着すれば、東日本大震災の風化を防ぐ一助になるということです。この季語があれば津波を思い出すきっかけになりますし、体験者が死に絶えても俳人は詠み続けます。

とは言っても、風化は避けられません。そして、次のような実に人間的な悲喜劇がまた繰り返されます。それが現実です。

津波忌や家より低き避難場所

敬親

(完)